貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告　第60集

津田北遺跡発掘調査概要

平成13年(2001) 6月30日
貝塚市教育委員会

1．はじめに

津田北遺跡は貝塚市北端部の津田川右岸河口部に位置する。岸和田、貝塚市の両市にまたがり、平成９年度に新規登録した遺跡である。遺跡の北はすぐ大阪湾となり、南には津田遺跡、堀遺跡等が存在する。また、北東に岸和田城下町遺跡、南西に貝塚寺内町遺跡が存在し、両遺跡の間には紀州街道が通っている。津田北遺跡の周辺には紀州街道沿いに津田村が存在している。中世の津田村については範囲、規模等不明な点が多い。近世の津田村は現在の津田南町にあたる。大正７年には㈱テザックの前身である関西製鋼㈱津田工場が建設され、昭和18年に帝国産業が設立、昭和25年には本社を津田事務所において操業を続けていた。

㈱テザック跡地の開発については平成９・10年度に道路部分（第Ⅰ期第１～３区、平成９年度）と共同住宅建設予定部分（第Ⅱ期第１～４区、平成10年度）について調査を行っている。調査では、中世～近世の耕作跡と中世以前の流路を検出し、津田川河口部の開発過程を解明する成果を得た。また、平成９年度には岸和田市側の部分について、岸和田市教育委員会が調査を実施し、近世岸和田城下町の町屋遺構の南西端が検出される大きな成果があった。

今回の調査は津田北町110－１他において、先述の第Ⅱ期第１区のすぐ北側に隣接した部分で道路建設が計画され、事前調査を行うことになったものである。調査は平成13年３月14日～４月４日に実施した。調査区は道路設置部分の東側、第Ⅰ期第１区に接して設定する予定であった。しかし下水道施設（汚水枡等）の関係上、西に約16m、南に約２mずらして南北10m、東西67mの調査区を設定した。調査区の南側は幅約2.5～3.5m、長さ約42mの範囲で第Ⅱ期第１区の調査区と重複している。以下、これまでの調査成果との対比を行いつつ説明する。

2．調査成果

調査区には層厚約1.5mの宅地造成時の盛土、層厚約１mのコークス層が堆積している。コークス層は工場操業時の堆積層で、肥前系磁器、瀬戸・美濃系磁器、産地不明の陶器、土師質土器等が出土した。

調査は、まず機械力でコークス層を除去した。コークス層下面には黄色粗砂～粘質土層で構築された堤状遺構とその東西両側に暗灰色粘質土の堆積を確認したことから、機械掘削をコークス層までとし、以下の層を人力掘削とした。調査地区は調査面の幅がせまいため、調査区東端から

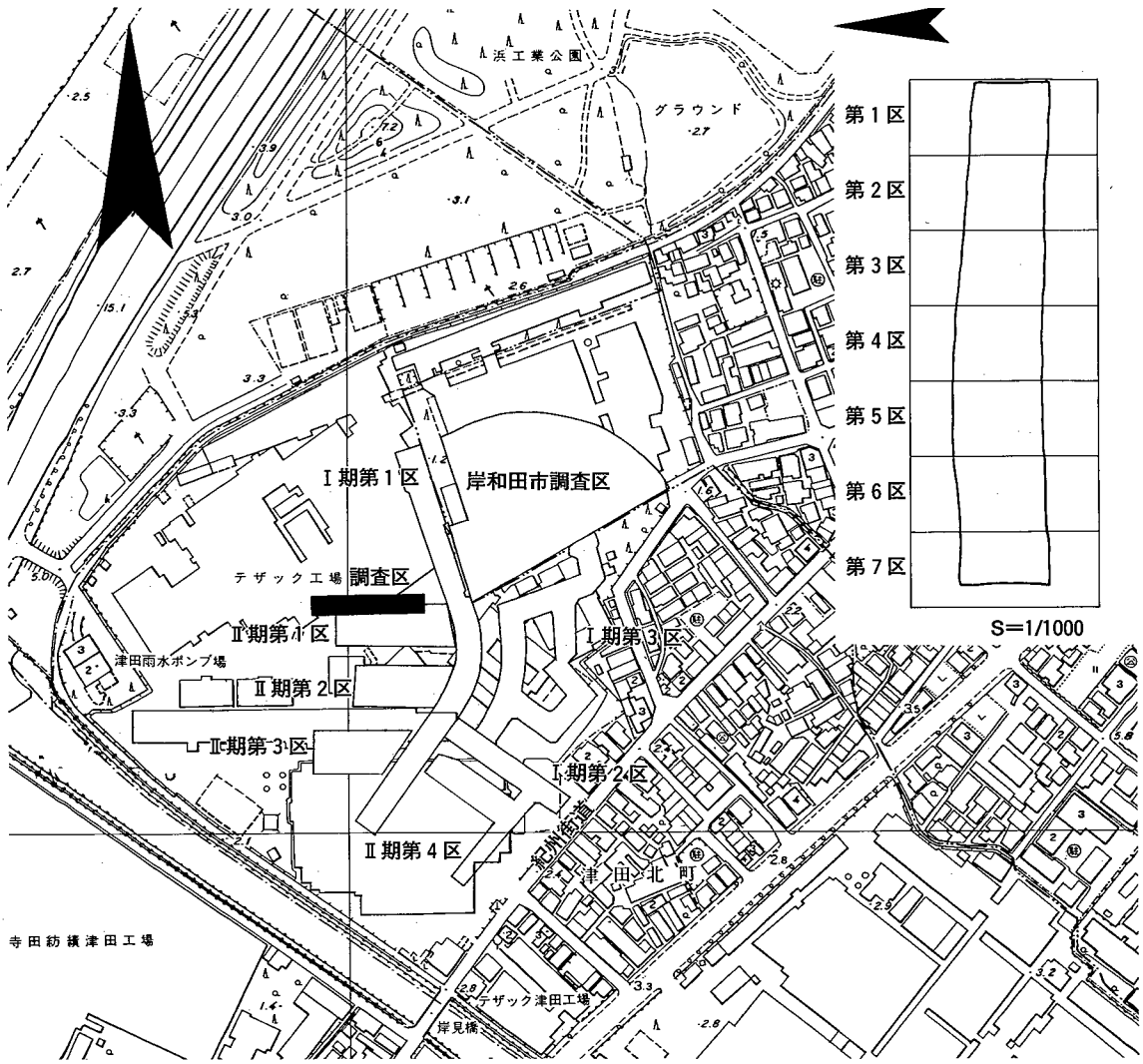


図1　調査区位置図（S＝1/4000）

10m間隔で区切り、東から第1～7区とした。

コークス層下面において検出した堤状遺構と東西両側で確認した暗灰色粘質土の堆積については、第Ⅱ期調査においても検出している。堤状遺構は堤12001に相当し、暗灰色粘質土の堆積は堤状遺構の東がＳＸ－12002、西がＳＸ－12001に相当する。調査時にはＳＸ－12001、12002の堆積を流路としていた。本調査においても、当初暗灰色粘質土の堆積を流路と考え、堤状遺構の東側をＳＸ－1001、西側をＳＸ－1002とした。

しかし、その後の土層観察によって、ＳＸ－1001、ＳＸ－1002はすべて流路堆積ではなく、耕作土もしくは流路堆積と耕作土が混在した堆積であることが判明した。その後の確認において、第Ⅰ～Ⅱ期調査時に流路とした遺構についても上層に耕作土が堆積し、当時の考察が認識不足であったことが判明した。以下、調査区土層断面図に従い、調査地における近世以降の土地利用の変遷について述べていく。

流路ＳＸ－1004（図2、3、写真1、2）

土層断面図第21～24、28、38、42～48、55、57層が該当する。調査地ほぼ全域にて検出してい

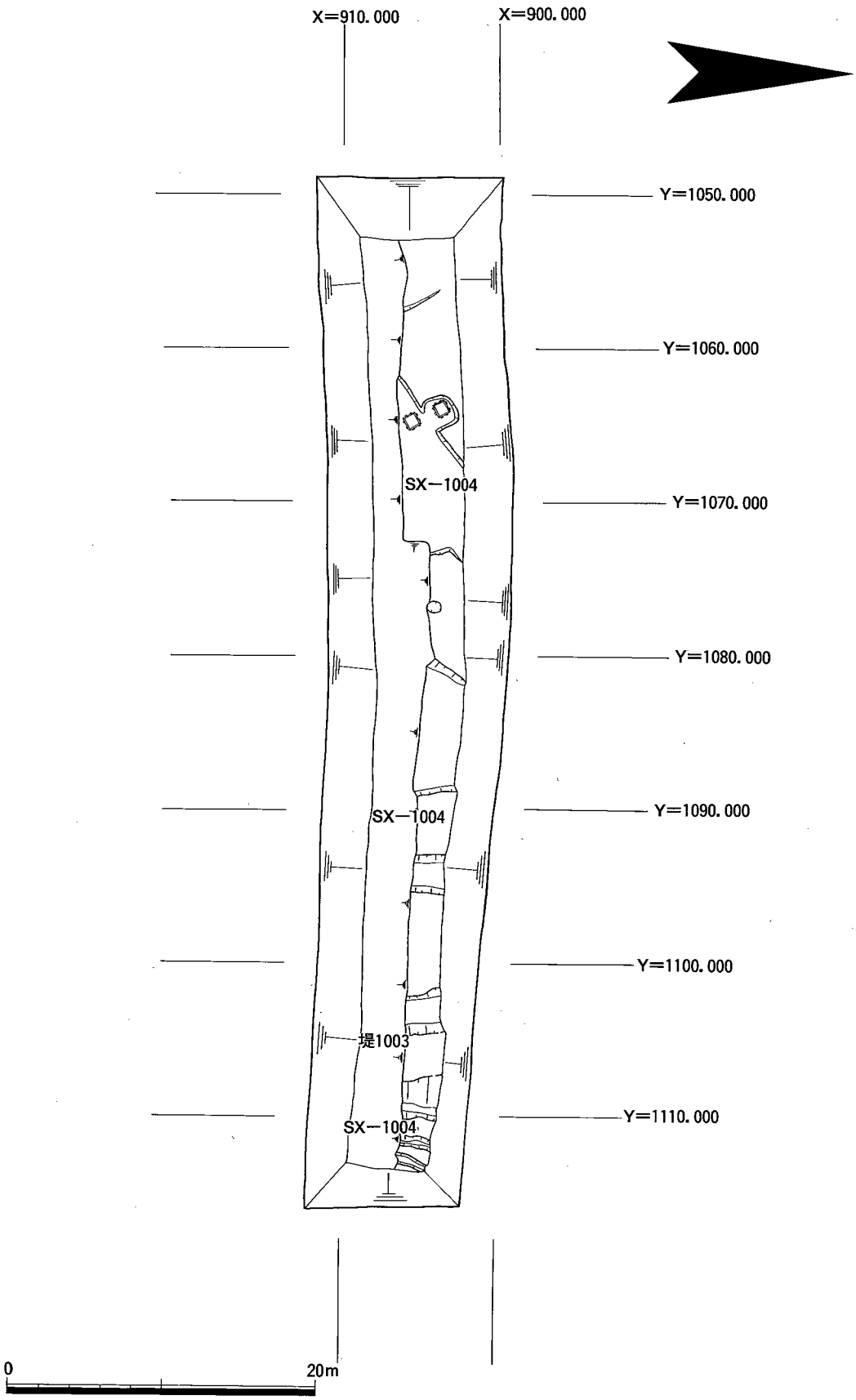

X=910.000
X=900.000
Y=1050.000
Y=1060.000
Y=1070.000
Y=1080.000
Y=1090.000
Y=1100.000
Y=1110.000
SX−1004
SX−1004
堤1003
SX−1004
0
20m

図２　調査区遺構配置図

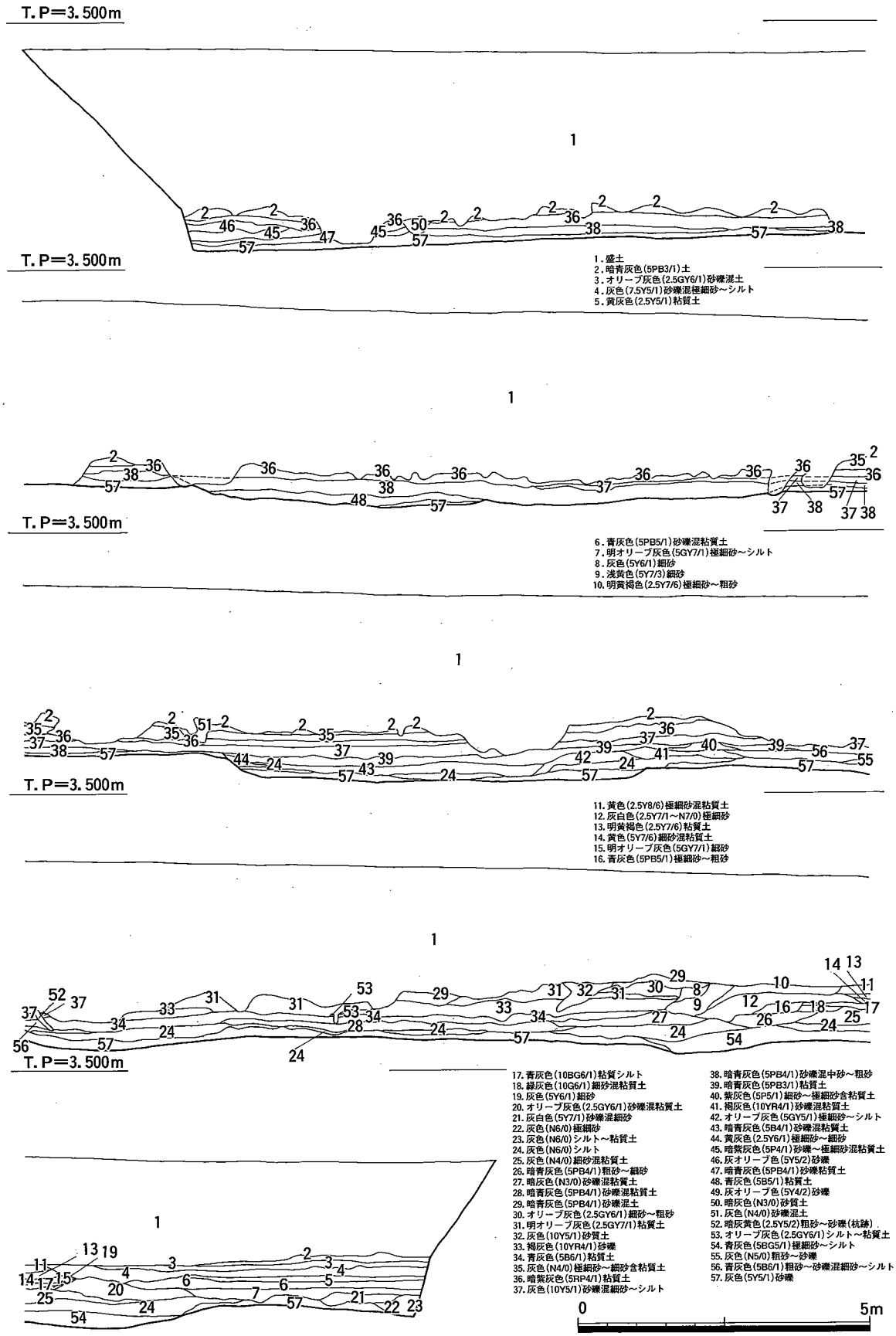

T. P=3. 500m
1. 盛土
2. 暗青灰色(5PB3/1)土
3. オリーブ灰色(2.5GY6/1)砂礫混土
4. 灰色(7.5Y5/1)砂礫混極細砂～シルト
5. 黄灰色(2.5Y5/1)粘質土
6. 青灰色(5PB5/1)砂礫混粘質土
7. 明オリーブ灰色(5GY7/1)極細砂～シルト
8. 灰色(5Y6/1)細砂
9. 浅黄色(5Y7/3)細砂
10. 明黄褐色(2.5Y7/6)極細砂～粗砂
11. 黄色(2.5Y8/6)極細砂混粘質土
12. 灰白色(2.5Y7/1～N7/0)極細砂
13. 明黄褐色(2.5Y7/6)粘質土
14. 黄色(5Y7/6)細砂混粘質土
15. 明オリーブ灰色(5GY7/1)細砂
16. 青灰色(5PB5/1)極細砂～粗砂
17. 青灰色(10BG6/1)粘質シルト
18. 緑灰色(10G6/1)細砂混粘質土
19. 灰色(5Y6/1)細砂
20. オリーブ灰色(2.5GY6/1)砂礫混粘質土
21. 灰白色(5Y7/1)砂礫混細砂
22. 灰色(N6/0)極細砂
23. 灰色(N6/0)シルト～粘質土
24. 灰色(N6/0)シルト
25. 灰色(N4/0)細砂混粘質土
26. 暗青灰色(5PB4/1)粗砂～細砂
27. 暗灰色(N3/0)砂礫混粘質土
28. 暗青灰色(5PB4/1)砂礫混粘質土
29. 暗青灰色(5PB4/1)砂礫混土
30. オリーブ灰色(2.5GY6/1)細砂～粗砂
31. 明オリーブ灰色(2.5GY7/1)粘質土
32. 灰色(10Y5/1)砂質土
33. 褐灰色(10YR4/1)砂礫
34. 青灰色(5B6/1)粘質土
35. 灰色(N4/0)極細砂～細砂含粘質土
36. 暗紫灰色(5RP4/1)粘質土
37. 灰色(10Y5/1)砂礫混細砂～シルト
38. 暗青灰色(5PB4/1)砂礫混中砂～粗砂
39. 暗青灰色(5PB3/1)粘質土
40. 紫灰色(5P5/1)細砂～極細砂含粘質土
41. 褐灰色(10YR4/1)砂礫混粘質土
42. オリーブ灰色(5GY5/1)極細砂～シルト
43. 暗青灰色(5B4/1)砂礫混粘質土
44. 黄灰色(2.5Y6/1)極細砂～細砂
45. 暗紫灰色(5P4/1)砂礫～極細砂混粘質土
46. 灰オリーブ色(5Y5/2)砂礫
47. 暗青灰色(5PB4/1)砂礫粘質土
48. 青灰色(5B5/1)粘質土
49. 灰オリーブ色(5Y4/2)砂礫
50. 暗灰色(N3/0)砂質土
51. 灰色(N4/0)砂礫混土
52. 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂～砂礫(杭跡)
53. オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト～粘質土
54. 青灰色(5BG5/1)極細砂～シルト
55. 灰色(N5/0)粗砂～砂礫
56. 青灰色(5B6/1)粗砂～砂礫混細砂～シルト
57. 灰色(5Y5/1)砂礫
0
5m

図3　調査区土層断面図

る。第１～２区にて幅1.5～8.5m、深さ0.2～0.5m、第３区で幅約３m、深さ0.1～0.2m、第３～４区で幅約6.5～９m、深さ0.1～0.3m、第５区で幅6.5～11m、深さ0.1～0.45mの流れが認められる。いずれも南から北に向かって流れている。

埋没した時期については、出土遺物から判断して東側第１～４区に堆積する21～24、28、42～44、55、57層と西側第４～７区に堆積する38、45～48層の２時期に分けられる。前者は17世紀中頃～後半の遺物が出土し、後述する上層の耕作土が17世紀末には開発を受けているため、おそくとも17世紀末までには埋没していたと考えられる。後者は45層にて丹波焼擂鉢（写真10）等17世紀～18世紀前半の遺物が出土しているが、最上の38層から19世紀代の遺物が出土するため、最終埋没年代は19世紀代と考えられる。45層からは刷毛目唐津鉢底部も出土している。調査地は津田川の河口部に位置し土地は安定していなかったが、東側から耕地化が進み、徐々に埋没していったものと考えられる。

堤1003（図２、３、写真３、４）

第２区で検出した堤状遺構である。長さ約2.5m、幅2.86m、高さ0.4～0.6mを測る。土層断面図第８～20層が該当する。流路埋没後に第25～27層の土を入れて、地盤を安定させた上で黄色粘質土や粗砂層を盛土している。第Ⅱ期調査の堤12001に相当する。当初流路にともなう堤を想定していたが、土層断面確認にて東側が耕作土、西側が流路であったことが判明し、本遺構は耕作地と流路を区画するものと考えた。遺物は本調査では出土していないが、以前に肥前陶磁器、瓦、土師質土器等が出土しており、18世紀前半には築かれていたものと考えられる。

東側耕作地（図３）

堤1003東側の第１区にて検出した層で、第３～７層の５層が堆積している。調査ではＳＸ－1001として掘削した。いずれも耕作土と考えられる。遺物は第６層から一重網手文の肥前系磁器碗（写真５）、第５層から京焼風肥前系陶器碗（写真６）、肥前系磁器碗、皿、丹波焼擂鉢が出土した。第４層から京焼風肥前系陶器碗、肥前系陶器碗、皿、肥前系磁器碗、徳利（写真７）、堺焼擂鉢、備前焼擂鉢、土師器皿が出土した。肥前系陶器碗には灰釉のもの（写真７－７）と現川刷毛目碗がある。また、肥前系磁器には雨降り文碗（写真７－４）や雪輪草花文碗（写真７－１、２）、草花文皿（写真７－３）、裏文が唐草文の皿、草花文徳利（写真７－５）等がある。第３層から柿釉皿、ほうらく、丹波焼擂鉢、甕、瀬戸・美濃系磁器碗等が出土した。出土遺物から第３層を19世紀代、第４層を18世紀中頃～19世紀初め、第５層を17世紀末～18世紀初めとし、以下の第６、７層はそれ以前の堆積とした。下層の流路からは17世紀中頃～後半の遺物が出土するため、17世紀後半～末には耕地化していたものと考えられる。

流　路（図３）

堤1003のすぐ西側の第２区において、青灰色粘質土（第34層）と褐灰色砂礫層（第33層）が堆積している。調査時にはＳＸ－1002とした。堆積状況等から流路と考えられ、幅10.8m、深さ0.3～0.4mを測る。第33層からは肥前系磁器、肥前系陶器、ほうらく、丹波焼擂鉢が出土した。肥前系磁器碗は雪輪草花文碗、コンニャク印判手碗、陶胎染付火入れ等がある。18世紀半ば～19

世紀初めまで流れていたと考えられる。第29～31層にて埋まっている。第29～31層からは多量の肥前系磁器、和泉音羽焼、ほうらく、土師質土器、焼塩壺、土人形、木下駄等が出土した。肥前系磁器は折松文皿、二重網手文碗、雪輪草花文、コンニャク印判手碗（写真８）がある。また土師質土器は「堺湊焼」刻印のある風炉、土人形は「見ざる・言わざる・聞かざる」、「傘」、「布袋」が出土した。また、「泉州麻生」銘の焼塩壺は古いタイプのもので、特に蓋に刻印がされているもの（写真９）は市内でも初の出土で貴重な発見となった。これらの遺物の年代から本遺構は19世紀代には埋まっていたものと考えられる。

西側耕作地（図３）

第３～７区において検出した層で、第35～37、39～41・56層が耕作土に該当する。調査時にはＳＸ－1002とした。ＳＸ－12001の上層に相当する。堆積状況や出土遺物等から段階が認められる。第１段階としてすぐ東側の流路と杭等で区画し、第41・56層、第39・40層にて耕作を行っている。その後、第２段階として第４区から耕作地が更に西側に広がり、第35～37層にて耕作を行っている。第37層からは和泉音羽焼、肥前系陶磁器が出土し、下層の流路堆積土から18世紀末～19世紀初めの遺物が出土している。このため、西側に耕地拡大を行ったのは概ねこの頃と考えられる。

第Ⅱ期調査区のＳＸ－12001、12002の堆積状況は調査地の耕作土や流路や溝等の各層に対応できる。第Ⅱ期調査では調査区より更に東側の状況が確認でき、堤状の堆積が認められる。以上のことから、東側から徐々に堤状の盛土をしながら耕地を確保していき、最終的に19世紀代には海岸部の方まで開発が及んだ状況が明らかとなった。

３．ま と め

本調査は平成９・10年度の岸和田、貝塚両市にまたがる大規模調査以来の本格的な津田北遺跡の調査で、非常に狭い範囲での調査にも関わらず、津田川河口部における開発状況を段階ごとに解明できる良好な結果を得た。

本調査区では東端から開発が始まっている。まず、流路堆積の安定していない土地に土を入れ、堤1003を築いている。堤1003は当初から検出時の規模ではなく、耕作の段階にあわせて盛土、整地されていったと考えられる。堤1003構築後、東側で耕作が開始される。耕地の確保時期は出土遺物から17世紀後半と考えられる。

その後、堤1003の西側に水路を確保した上、さらに西側に耕地を拡大している。耕地拡大の時期は出土遺物から18世紀後半である。以降、段階を経て調査区西端まで耕地を拡大し、19世紀代には調査区全域に耕作地が広がっている。

河口部の耕地開発については、大阪の神崎川、木津川、安治川、大和川等に見られるように慶長から江戸時代を通して続けられていた。こうした耕地の拡大は当時の情勢を含めた様々な理由によるものである。[1] 岸和田藩では寛永８年（1631）に入封した松平氏の時代に石高の増加が認められるが、それは年貢の増税によるものである。税率は元禄７年（1694）で平均77％にのぼる

とされ、過酷な収奪により度々領民の反発を招いていたという。反対に享保７年（1722）の文書には新田畠の税率は20%の低率であったとされ、領民は高額の年貢を納めるよりも税率の低い新田の開発へと移行したと考えられる。[2] 今回検出した耕作地はこうした新田開発によるもので、津田川河口部において積極的に行われたと考えられる。

遺物については、平成９・10年度調査時と器種構成等に変化はない。供膳具は全時期を通して肥前系磁器が中心である。瀬戸・美濃系陶器は18世紀以前は天目碗等出土が限られており、茶陶関係の道具のみ使用していたと考えられる。19世紀になって供膳具として磁器碗皿類が出土する。また、18世紀後半～19世紀になると在地産陶器の出土が多くなり、肥前系陶磁器類と出土量を二分する。出土している在地産陶器は胎土が堀新遺跡や貝塚寺内で出土する和泉音羽焼と同じ灰色の硬く焼き締まったものがほとんどである。他に形状は類似するが胎土の異なるものが２～３種類確認できる。流通の利便性から近くに窯がある和泉音羽焼が主流であったが、他地域からの陶器も流通していたことがわかる。

調理具の擂鉢は早い段階には丹波焼の出土が目立つ。少し後からは堺焼が主流となる。少量ではあるが備前焼も出土している。十能、ほうらく等は土師質土器が主流を占める。19世紀代になると、在地産陶器の土鍋等が出土している。

貯蔵具は本調査では破片が多く、大型品は確認されていない。平成９・10年度調査成果と比較すると丹波焼甕、土師質土器甕等が使用されていたと考えられる。

焼塩壺は全て在地産で刻印のあるものは「泉州麻生」である。特に今回出土した蓋に刻印されているものは市内では初の出土となった。今回出土はしなかったが、平成９・10年度調査において「イツミ花焼塩ツタ」銘の刻印がある焼塩壺も確認している。

遺物については、岸和田市域の調査成果と比較しても相違はない。器種構成、様相等はほぼ同じである。本調査区における17世紀以降の整地盛土等には呉器手の肥前系陶器類の出土が目立つ。また、伝世品と考えられる良品も多い。これらはすぐ北側の岸和田市域から持ってきた土である可能性が高い。以上のことから、津田北遺跡では岸和田城下との関係を考える必要がある。

以上、今回の調査概要について遺構、遺物の状況をまとめた。前回調査時には中世からの耕地拡大の状況についてまとめたが、今回調査により若干の修正が必要となった。そこで再び今回調査結果も含めた全調査を総括して、津田川河口部が開発される過程を考え、今回調査のまとめとしたい。しかし、本報告では紙数の制限もあり、細かな記述や図等の提示はできない。平成９・10年度調査の詳細な情報については両市の出した各報告書を参照されたい。[3]

津田北遺跡は貝塚、岸和田両市にまたがる遺跡であるが、貝塚市域で検出した遺構はほとんどが耕作に伴う溝や井戸である。調査では紀州街道沿いに14～15世紀の遺物を出土する耕作層を確認し、耕地開発は中世から始まったことが判明した。紀州街道沿いの地盤は周辺より高く、地山は粘質土である。周辺一帯は流路堆積が認められ、流路の影響を受けない地盤の安定した場所を選んで耕作を開始している。16世紀～17世紀には流路の合間をぬって、第Ⅰ期第１区を中心としてやや南寄りに耕地を拡大している。

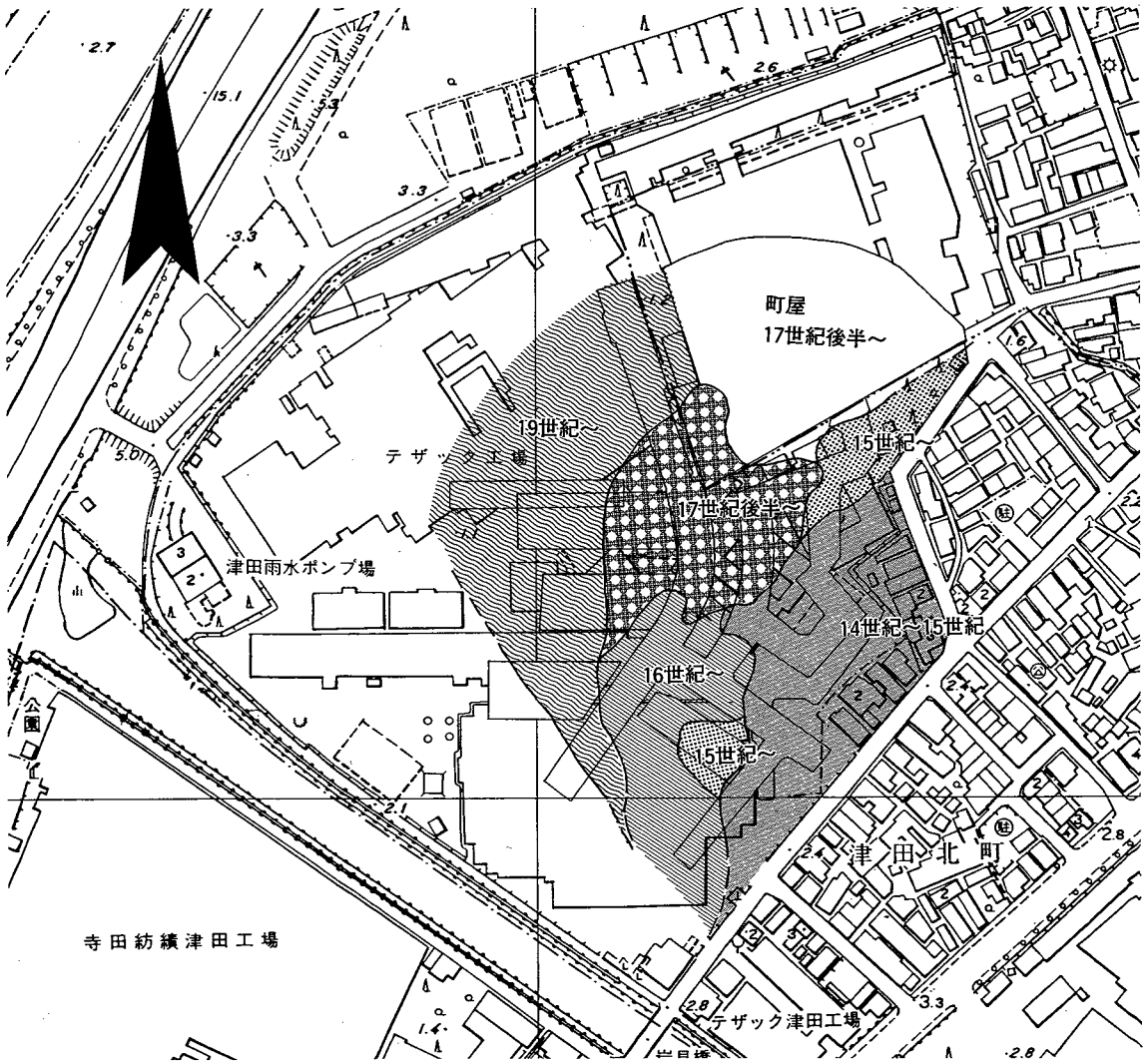


図４　津田北遺跡耕地開発状況図（Ｓ＝１/3000）

以上のような耕地拡大は前述したように慶長年間からの時勢による動きと考えられる。当時の河口部における耕地開発は他地域の開発例から有力町人が中心となり、小作人が田地を拡大させたと考えられる。本遺跡でも街道や集落に近く、比較的土地が安定して開発しやすい場所を選んで開発を行っていることから、有力町人の指導のもとで行われたものと考えられる。

その際中心となった人物については明らかではないが、実際に開発を行った集団については、紀州街道より南東に位置する津田周辺の集落に住む人々であったと考えられる。

17世紀代には本調査東端部を含め、北西の流路部分に耕地を拡大している。平成９・10年度調査の地山上面で検出したＳＸ－4001、ＳＸ－3605、ＳＸ－27001等の流路については、調査時に近世後半まで残っていたとしたが、再確認の結果、本調査同様上層で耕作が行われていたと判明した。

岸和田市域では藩主岡部宣勝が岸和田市土生町の泉光寺に移住した際の供侍を宣勝の死後寛文８年に移住させた（山下分け）とされ、記録に残る町屋跡が検出されている。町屋面より下層は南西の一部に本調査や平成９・10年度調査第Ｉ期第１区や第３区で確認された暗灰色粘質土が存

在するほかは砂層と粘質土が互層となっている。岸和田市域は貝塚市域と比較すると若干低くなっていることから、岡部氏の供侍移住によって町屋が形成される以前は流路が存在し、耕地利用等もされなかったと考えられる。

今まで流路で土地基盤が安定していなかった場所に堤状の施設を作り、新たに耕地拡大をすることはかなりの労力が必要であったと考えられる。岡部氏の供侍移住の時期とも一致し、17世紀後半に大規模な土地改変が行われたことは確実となった。このような大規模な土地改変は低率の新田開発を求めた領民のみで行うことは難しいと考えられる。藩の主導で行われた可能性は高く、領民主導型の開発から岸和田藩主導型の開発へ変化したと考えられる。本遺跡における大きな画期であった。

17世紀以降は徐々に河口部に向けて耕地を拡大し、18世紀後半～19世紀代には第Ⅰ期第1区南西隅と第Ⅱ期第3区西端を残し、調査区全域において耕地化している。その後、明治、大正期から工場建設以前まで耕作地であったと考えられる。

以上、段階ごとの耕地開発状況について概要を述べた。今回の調査で検出した耕作土は、本遺跡における中世からの開発の歴史の中で17世紀後半の画期以降、19世紀までの開発に関するものである。また調査地西側の海岸に近い部分においての開発について明らかにし得た。

町人主導型の開発から岸和田藩主導型の開発への変化については文献史料等が乏しく、これを裏付けられる根拠は少ない。しかし、紀ノ川流域では近世中期以降に氾濫原における紀州藩の積極的な境界設定が行われ、錯綜した領有関係を整理したという。[4] また、本調査で出土した遺物は岸和田城下出土遺物と変化はなく、岸和田城下との関連があったことは確実であると考えられる。岸和田藩の政策のもとで耕地開発が行われていたことを裏付けるものである。

今回の総括はあくまで推定の域を出ないものだが、今後の調査によって明らかにし得るものと考えられる。紀州街道より北西の海岸部における開発については、平成9年度以降の調査によりある程度の状況はつかめてきた。今後は紀州街道沿いから東側の状況を明らかにし、津田川河口部の開発を担ってきた人々とその集落について考えていかねばならないだろう。

参考文献

1）石川健次郎「新田開発と商業的農業」『大阪府史』 第5巻 近世編 第2章 第3節
大阪府 1985. 3. 30

2）岸和田市立郷土資料館 『岸和田藩の歴史』 開館25周年記念特別展展示図録 1995

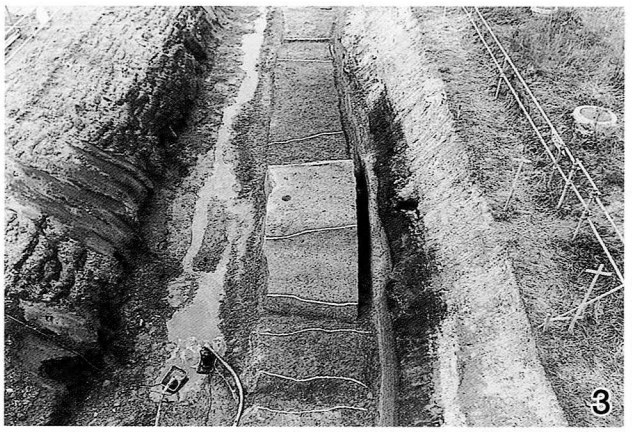
3）貝塚市教育委員会 『津田北遺跡発掘調査報告』 貝塚市埋蔵文化財調査報告第53集
2000. 3. 31

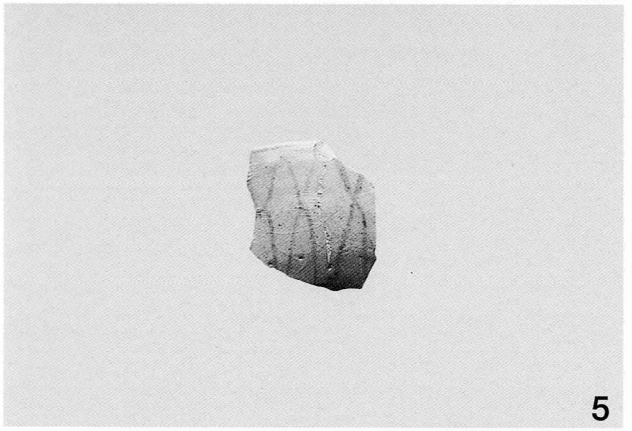
岸和田市教育委員会 『津田北遺跡－（仮称）岸和田・貝塚団地建設に伴う発掘調査報告書－』
岸和田市文化財発掘調査報告7 1999. 3

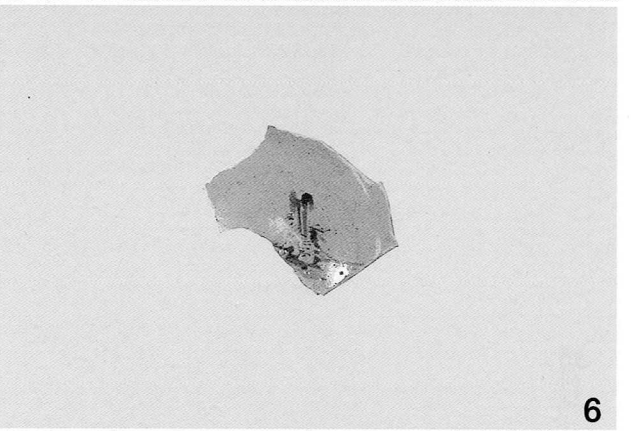
4）前田正明「近世前期の新田開発と境界認識－紀州藩領と高野山寺領の境界争論を通して－」
『和歌山県立博物館研究紀要』 第3号 和歌山県立博物館 1998. 3. 31

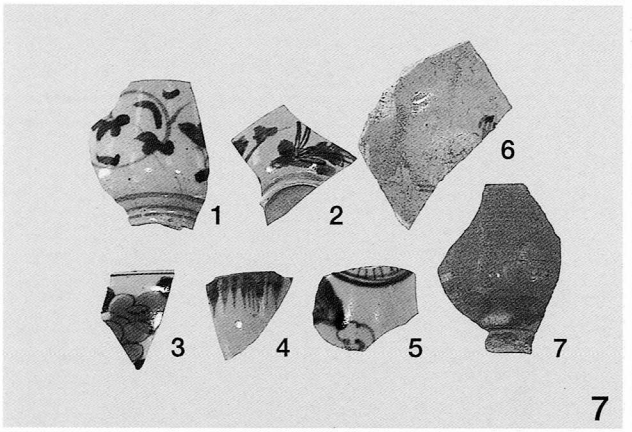
写真１．調査区全景　　西より

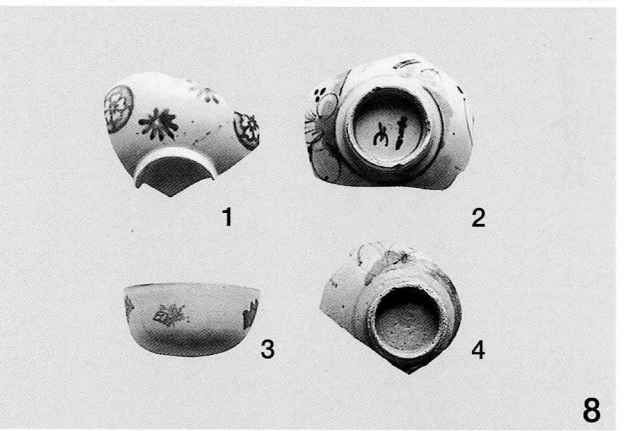
写真２．調査区全景　　東より











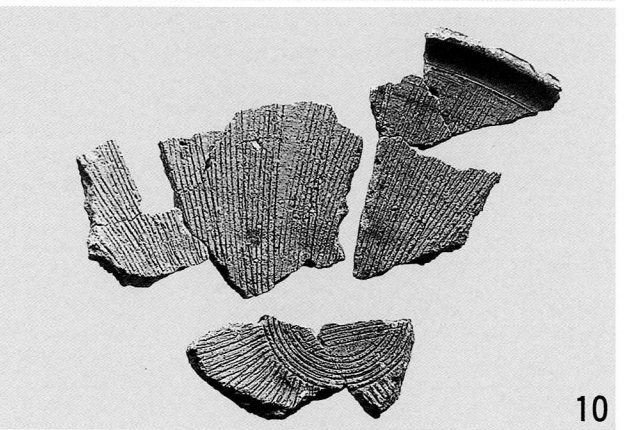


写真３．堤1003 東より　４．堤1004 南より　５．東側耕作地第６層出土遺物　６．東側耕作地第５層出土遺物　７．東側耕作地第４層出土遺物　８．西側流路第29層出土遺物　９．西側流路第29層出土遺物　10．流路ＳＸ－1004出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	つだきたいせきはっくつちょうさがいよう
書名	津田北遺跡発掘調査概要
副書名	
巻次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第60集
編著者名	上野　裕子
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597-8585　大阪府貝塚市畠中１丁目17番１号
発行年月日	西暦2001年６月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つだきたいせき 津田北遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 つだきたちょう 津田北町110－1他	27208	102	34° 27′ 12″	135° 21′ 49″	20010314～ 20010404	670	道路建設 下水道敷設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
津田北遺跡	散布地	近世	耕作跡・流路	陶磁器・瓦・木製品	

貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告　第60集

津田北遺跡発掘調査概要

発行日　平成13年（2001）６月30日

編集・発行　貝塚市教育委員会

大阪府貝塚市畠中1丁目17番１号

印刷　摂河泉文庫（貝塚市北町20－18）